

滋賀研修旅行 1日目

2012年8月2日(木)

参加者:谷、太田、岡村、狐崎、松山 他4名

報告者:松山ちえみ

今回の目的地は滋賀県、初日は近江八幡市を目指します。まず、ボーダレス・ミュージアム NO-MAで開かれている「現代の名工 廣島一夫の手仕事」展を見学しました。近江八幡市内の伝統的建造物保存地区にある昭和初期の町家を改築した落ち着いた雰囲気ミュージアムでした。

1階に廣島一夫氏の作品が、2階には数人の作家達の作品が展示されていました。また、2階ではワークショップや実演が行われおり、私達も熊本から参加されている井上克彦さんの実演から見学。

竹を何回か裂いて3mmほどの竹ひごにしてザルを編むところをみせていただきました。3mmの細い竹ひごは1本1本丁寧に面取りされたかまぼこ状になっており、これでザルの水切れが良くなるのだそうです。若手の作家さんでしたが、説明をしたり質問に答えながらも手を休めないしっかりとした職人技をみせていただきました。

その後1階へ降り、井上さんに説明していただきながら廣島一夫氏の作品を見学しました。展示されていたのは、廣島一夫氏の「青物」と呼ばれる竹細工で農家などで使われていた作業用の道具や日用品です。飯籠、魚籠、背負い籠、いりこ籠など、さまざまな籠やざる。それぞれ用途によって竹の太さや編み方が違い実に美しい。茶道や花道に使われる鑑賞用に作られた美術工芸品とは違い、使う為に生まれてきた物たちなのに本当に美しい。今の私の生活の中にはこういった道具を使うという習慣があまりないせいもあり、飾って楽しみたいと思ってしまう。道具だから飾って愛でるものでなく、使い込まれて生きてくるのだろうけど…。

この廣島一夫氏は宮崎県日之影町に生まれ、15才で丁稚奉公に入り、以来およそ80年にわたり竹細工職人として生きてこられた97才になられる方だそうだ。その作品はアメリカのスミソニアン博物館やイギリスの大英博物館にも収蔵されているのだが、国内ではめったに宮崎県外で展示されることがなかったそうだ。

「道具だから自分の勝手というわけにはいかない。かたちも大きさも、使う人に教えてもらった」「使う人に喜ばれ、その人の必要性にあったものがつくりたい」と昔は注文主の家で寝泊まりをして軒先で仕事をしながら村々を巡って歩き、前よりもうちよつといい仕事がしたいと努力を続けた方の言葉は染みます。廣島さんと言う方を今回初めて知りました(勉強不足で申し訳ないことです)が、展示されている作品、使い込まれ小刀などの道具、籠の寸法や雑感を書き記された小さな手帳、そして井上さんの熱心な説明などから、その人物像に触れて心引き締まる一時でした。

帰りに玄関先の庭に置かれた籠がこのミュージアムの建物ととても似合っており、改めて“用の美”を感じつつ、次の「たねや日牟禮ヴィレッジ」へと移動しました。

ここでお茶の時間です。特別室を予約していただいてあり、ヴォーリズ設計の建物内でお茶とお菓子をいただきました。ウィリアム・メレル・ヴォーリズはアメリカ人建築家で明治末期から昭和にかけて日本各地の学校や教会、病院、住宅などを多数設計した人物で、現在の近江兄弟社の創立者の一人でもあります。ここ近江八幡には数多くの建物があり、それを保存していこうという活動がされています。お茶の後、市内に現存するヴォーリズの建物をさがして散策。記念館のようにになっている物もあれば、現在も住宅として使われている物など、近江八幡の街並の雰囲気を作る要素となっていました。

そして夕日のなか、琵琶湖大橋を渡って宿泊地 雄琴温泉 へ向かいました。

滋賀研修旅行 2日目

2012年8月3日(金)

参加者 10名 (谷 太田 岡村 狐崎 小林 松山 他4名) 報告者 狐崎ゆうこ

研修旅行2日目は滋賀県の木工家工房訪問3連発。

宮本貞治さん(大津市) 伝統工芸展でたびたび受賞、今年も入選・受賞された。

山形満さん(大津市) 19歳から6年間黒田辰秋のもとで修業し、現在は谷さんと同じ国画会工芸部会員。

浜田由一さん(米原市) 自ら木工道具を開発してプロの木工家を対象に作り方講座などを開催、また名作椅子の精巧な模型で有名。木工研究会でも度々講師をされておなじみ。

~~~~~

最初は宮本さん。

市街地から車でわずか10分程度なのに山の中に入る。築35年くらいの工房にかぶせるように自宅が建てられている。居間にあがると木々の隙間から琵琶湖がのぞく。建物も豪華だ。

材木屋から安く譲ってもらったそうだが、クリやケヤキの柱・梁・床にはご自分で漆を塗り、引戸もケヤキの古材が使われて存在感たっぷり。圧倒されてしまい、初めのうち我々は遠慮

がちに世間話ばかりしていた。

次に案内された和室には伝統工芸展出品作などが並んでいる。

「樺拭漆漣紋楕円卓」(西川栄明『一生つきあえる木の家具と器』(誠文堂新光社)参照)を見てつい我慢きれず、作り方を尋ねてしまった。

脚は樽の胴の要領で接着。接着剤はSH20に漆を混ぜて使う。接着剤の色が出ない上に乾きが少し遅くなり、粘りが出るそうだ。そして漆を塗った後で天板と脚を接合。天板に溝がついてあり、エポキシで接着。板の伸縮に対応するため、脚の一部は合板状に張り合わせて使っているが、木口を見てもわからないように加工してある。

更に加工前から材料は乾燥室に入れ、除湿機で40%にして保管しておく。加工中も毎晩仕舞う。これで百貨店を回ってもトラブルなし。

見た目だけではわからない数々の工夫が凝らされている。

最後に工房へ。3×4間の機械室、隣に漆塗りの部屋がある。機械は意外に大きい。手押しは巾400くらい、自動は500?バンドソーは高さ300だろうか。

宮本さんは機械いじりも好きで、トリマーやサンダーなど電動工具のコードはすべて5センチくらいに短く切ってある。代わりに掃除機などのコードリールをあちこちに取り付けて延長コードにしている。

なんだか伝統工芸っぽくない。

~~~~~

次の山形さんの工房は宮本さん宅のすぐ近所なのだが、雰囲気まるで違い別荘風の建物が立ち並んでいる。機械の音が出るからと家の少ない場所に引っ越したのに、すっかり様変わりしてしまったようだ。

ご自宅はこじんまりした庭のある、一見普通の家なのだが、庭の一角に小さな材料置き場が。トタン屋根をかけた棚に「アサダ」などと書かれた板が並べてある。

工房は自宅の台所を改築したところで、2×2.5間くらい。さかんに「狭いところで・・・」と恐縮されていたが、10人で押しかけてあれこれ覗きこんで、こちらのほうこそ申し訳ない。

元台所だからなのか、この部屋は扉が多い。四方に6カ所。残った壁面にコンパクトに道具が収められている。鋸・野引の棚、鑿の棚、鉋の棚、電動工具の棚、流し台が置かれ、中心に作業台と荒取り中のお盆。料理屋の運び盆だそうだ。

大型機械は全くなし。サンダー、丸のこ、トリマー、ドリルと電動工具も少ないため、加工は

ほぼ手作業となる。これぞ昔ながらの木工家という感じだ。

作品は他にもお寺の御道具(本堂の改築にあわせて注文、完成まで 10 年以上もかかった。)や、文机、厨子など、注文制作が多い。

しかし、「文机や箱は生活で使われなくなって、自分の作りたいものとは変わってきている。」と少しさびしそう。

~~~~~

さて最後は浜田さん。

琵琶湖を 2 時間かけてほぼ半周。参拝客のお賽銭だけで年 300 万にもなるという有名な湧水の神社のすぐ近く。ちょっとした洗い物ができる水路が小道の横に流れる、古い民家の中にご自宅と工房がある。

工房は 2.5×3.5 間くらいの 2 階建て。赤い壁に緑の看板のかわいい外見と違い、中身はいろいろなアイデアがぎゅうぎゅうに詰まって、まるで研究所だ。

一階は木工機械の部屋。電源は 100V のみ。ペティワーク(=横切。日本語では呼ばないのだ)、テーブルソー(=昇降盤、20 万円)、スパイラルカッター(=手押し、8 万円)、バンドソー、ベルトサンダー、自動、超仕上、角のみ、集塵機、ボール盤に旋盤、天井には空気清浄機。9 坪弱にぎっしり。

「日本の昇降盤は最低最悪」という浜田さんは、海外の精度の高い機械をカタログ買いし、不具合を感じたら自ら手を加え、「オリジナルの状態の機械は一つもない」というくらい改良している。

テーブルソーにはデジタル表示の微調整定規、ボール盤にはレーザーポインター、総計 100 本くらいあるポニーや F クランプには合板の当木が取り付けられている。

2 階は金属加工室で、マイクロ旋盤、マイクロフライス盤、ローラー等々、木工道具を作るための金属用の小さな機械がどっさり。どれもこれも物珍しく「これはなんですか？」という言葉が飛び交う。

ここで作られる道具は、既製品よりも安く、便利に使えるよう工夫されている。

たとえば三点クランプ(椅子の脚と笠木の接合などに使う。)、チップソー研磨機(JIG を取り付けることでバンドソーの刃やルータービット、ドリルビットも研磨可)など。講座では作り方を教えてもらえる。

そして隣の自宅 2 階には、椅子模型の部屋。あわせて 1.5×3.5 間くらいのスペースに、ウェグナーの居間の模型。その中と壁の棚に、合計 100 脚くらいの 1/5 サイズの椅子がずらりと並んでいる。

ペーパーコードは糸、トーネットの曲げ木部分は丸籐、金属パイプの椅子はめっきでステンレス色をつけ、ネジも 1/5 サイズ。写真では本物と見分けがつかない。鬼気迫る凝り性である。

製作用の道具は帆船や鉄道模型の店で探すほか、自分でも作る。機械が好きそうな浜田さんだが、ここでは豆ガンナが活躍している。ただし模型椅子の仕口は秘密。この続きも講座で。興味のある人は浜田さんのホームページを見て講座に参加しよう。

~~~~~

滋賀県は、関西の木工家には住みよい土地で、京都・大阪からの移住者が多いそうだ。この 3 人も県外出身者である。そんなところは長野県にも少し似ている。

木工のような小さな業界に、まだまだすごい人が沢山散らばっている。この先私はやっつけけるのか・・・。

という不安はさておき、予定の時間をオーバーして我々は帰途に着いた。家にたどりついたのが 12 時過ぎだった人もいたそうだ。ちょっと優雅だった食事やデザートを含め、なかなか充実した楽しい 2 日間であった。



廣島一夫展の会場風景



工房で小鉦の説明をする宮本貞治さん



工房で自作のクランプの説明をする浜田由一さん